

雨が好きになった理由

三蔵子小・4 藤城涼花

雨の降る梅雨どき、ある町に一けんの家が建っていました。じめじめした家の中で、春花という女の子はたいくつそうに、まどごしに庭を見ていました。

庭は、雨でぐしゃぐしゃです。そんな庭を見て春花は

「雨なんか大きらい。」

とつぶやきました。そんな春花のつぶやきを雨は聞きもしないで強さを増していきます。春花は、さらにたいくつになってしまいました。春花は、こんなことを考えていました。

「早く外で、運動したいな。」

そんなことを考えながら、別のことも考えていました。雨の良さです。今まで、自分にとって雨の存在は運動をできなくしてしまういやなものでした。少しでも雨の良いところを探そうと意気込む春花でしたが、出てくるのは雨のいやなところばかりです。

「雨の良いところなんてないんだ。」

そうあきらめかけたとき、ふいに家の電話が鳴りました。春花が電話に出ると、その相手は友達のあやめでした。電話の内容は、いっしょに雨の日の散歩をしようというおさそいでした。それを聞いた春花は

「雨なんかきらいだからいやだ。」

と言いました。それを聞いたあやめは

「わたしは雨が好きだよ。雨がかさにあたると、てんてんとんという音がするし、水たまりに入るとパシヤッピシヤッと音がするから好きなの。」

と言いました。あやめの好きな理由を聞いた春花は思いました。

「雨にも良いところがあったんだ。」

春花は、あやめに言いました。

「わたし、やっぱり行く。」

そして二人は、いっしょに雨の日の散歩に出かけました。

まず二人は、いつもいっしょに遊ぶ公園に行きました。公園には、雨の日ということで人はいません。でも、その分、いろいろな雨の音が聞こえてきます。ほかにもかえるの鳴き声も聞こえます。二人は、公園で散歩をしました。歩いていると、あじさいの葉にかたつむりがいました。

「雨の日は、いつもは見ることでできない生き物があるんだ。」

と春花はつぶやきました。それを聞いたあやめは、

「春花が雨を少しだけ好きになってくれてよかった。」

と言いました。春花は

「あやめが言ってくれたからだよ。散歩にさそってくれてありがとう。」

と笑顔で言いました。家に帰ると春花は、お母さんに

「雨っておもしろいね。」

と言いました。それを聞いたお母さんは、

「何があったのかしら。」とつぶやきました。春花は、今度はわたしからあやめをさそおうと思いました。